

## 48 四国医療専門学校所蔵「紀伊国海部郡加太浦今井氏所蔵」 張子二体組銅人形について

松木 宣嘉

四国医療専門学校 鍼灸マッサージ・鍼灸学科

【緒言】四国医療専門学校には複数の銅人形が所蔵されている。そのうち一体は元禄7年製の木製銅人形で、すでに長野仁により研究報告がなされている。今回調査したのは張子の大小二体組銅人形で、大人形は体高71cm、肩幅21cm、左右対称に諸脈交会画法にて十四経が描かれている。小人形は体高49cm、肩幅12cm、左側に奇経八脈、右側に骨度が描かれている。この人形には二体を同時に収納できる共箱が付属しており、その裏面に「紀伊国海部郡加太浦今井氏所蔵」と記載がある。この記載を手がかりに、旧所有者の今井氏について調査したため報告する。

【方法および調査結果】まず紀伊国海部郡加太浦とは現在の和歌山市加太のことであろうと考え、この地を調査した。加太には現在四つの寺院があり、聞き取り調査を行った結果、一カ所の寺院で今井姓の檀家があり、現在も医師であるとの調査結果を得た。その後、今井家現当主とも連絡を取ることができ、今井家には1865年に書かれ、1969年に複写された家系図が伝わっていることをご教示頂いた。

現当主によると、今井家は元々早瀬家という名の家であり、初代早瀬八左衛門（生年不明-1655）の実子である二代目了源（1628-1709）から今井と名乗っている。その後三代目に養子の立碩（生没年不明）、四代目立碩（生年不明-1758）、五代目立碩（生年不明-1796）と3代同名の当主が続く。その後六代目立元（生年不明-1804）に跡継ぎがなかったため、根来立塚に今井家の家業相続を頼み、七代目立宅となった。この根来立塚の2代前にあたる根来立堂（生年不明-1797）は、官医の根来立菴およびその子である立軒に医学を学び、根来の姓を賜ったそうである。

次に文献による調査をおこなった。和歌山県立文書館の『紀州家中系譜並に親類書書上げ』にある享和元（1801）年に早瀬文左衛門方義が提出した「系譜」をみると、早瀬八左衛門の惣領、初代早瀬数右衛門（生年不明-1685）の次男に「海士郡加太浦医師 今井立碩」との記載があった。早瀬八左衛門は今井家の初代であることから、二代目了源は兄弟の次男を養子にして、三代目立碩にしたのではないかと思われる。さらにこの記載により、今井家は遅くともこの頃より加太の地で医師をしていたことが推測される。

また、『紀州家中系譜並に親類書書上げ』にある寛政八（1796）年に根来立菴が提出した「先祖書 親類書」によると、根来家は古くは金瘡治療をおこない根来流と唱していたことが書かれている。また提出者の高祖父である根来大助高政（生年不明-1732）が享保六（1721）年に立菴と改名したとあり、曾祖父には根来立軒明房（生年不明-1762）の名があるため、年代からも根来立堂はこの親子に医学を学んだことが推測される。また、根来立菴の名は『和歌山県史近世資料一』中の「文久元 紀土鑑坤」にも名前があり、小普請御医師格で廿三人扶持となっている。同じ頁には東京国立博物館所蔵の銅人形の製作に関わった飯村玄斎の子孫である六代目と思われる飯村玄斎の名前がみえる。『紀州家中系譜並に親類書書上げ』には明治元年に根来立道が提出した「親類書」もあるため、根来家は明治まで続く医家であったことがわかる。

【まとめ】調査の結果、今井家は遅くとも1600年代後半から加太の地で医師をしていたことが推測できた。また今回対象とした銅人形は、大人形が左右対象に十四経が描かれ、小人形には奇経と骨度が描かれている。先行研究ではこのような作りの人形は、岡本一抱以前、浅井周伯の影響によるものとされている。この銅人形がいつ今井家に伝わったかは定かでないが、今井家はこの銅人形が製作されたであろう時代から続く医家の家系である。以上の点から、この銅人形の旧所有者は今回調査した今井家であろうと思われる。